

学習の場としての修学旅行 —タイ学習旅行—

Report on Study Tour to Thailand

50 期

金城啓一、浅田孝紀、井上哲明、上原信子、須藤俊文、仁野平智明、
根本賢一、福元康貴、保戸塚由紀子、安井崇、山川志保

<キーワード> (総合、 テーマ、 国際性、 学校訪問、 コース別研修)

I. タイ学習旅行の設定理由

2003 年度より新学習指導要領における「総合的な学習の時間」が本格的に実施されることとなった。本校では従来より、修学旅行を中心として各種教科行事や学年行事との間に有機的連関性を持たせることで、実質のところ「総合的な学習」を行い、特に修学旅行においては、1 年間に及ぶ事前・事後学習を挟んだスパンで進められ、テーマ学習としての大きな実績を積み重ねてきた。50 期生が入学し、先に述べたように新学習指導要領の実施となり、より大きな学習効果を求めて修学旅行の発展的な形を検討してきた。本校生には、将来的に世界を活動の場として国際的に活躍することとなる者が少なくない。現在の国際化社会で求められるアジアの視点について考えはじめるきっかけを、在学中に与えることはできないか、また、ローカリティを尊重したグローバルバージョンのあり方など、国際協調に対する問題意識を持たせることはできないかなどと考え、さまざまな方法を模索してきた。

そこで、日本と文化的・歴史的・経済的にも関係の深い、タイ王国をフィールドとした学習旅行を計画した。日本を含むアジア圏の国であり、親日的でもある。そして何より、タイ国からの留学生を昭和 50 年度 (22 期生) から毎年受け入れてきており、タイ本国を中心に世界中で活躍する卒業生が、現在 100 名を越えているという強い関係性が存在する。その卒業生諸氏や在日タイ国大使館、タイ王国政府の大いなるバックアップが期待でき、こうした大使館や OB・OG の協力を仰ぎ、旅行者まかせではない多彩な訪問先を開拓していけるという実に恵まれた状況にあると考え、世界中の中で、本校が海外をフィールドとするには、タイ以外にはないだろう、との結論に至り、タイをフィールドとした学習旅行が、極めて意義深く、学習効果の高い有意義なものであると考え、当学習を企画した。

II. 学習旅行のねらい

(1) 目的

- ①タイの歴史、文化、産業、生活、日本との関わりなどについて学ぶ。
- ②タイの高校生との交流により、国際理解、国際親善を深める。
- ③見学・体験学習を通じて異文化理解を図る。
- ④国際化社会で求められるアジアの視点の必要性を考える。
- ⑤国際平和について考える。
- ⑥個人の学習テーマを設定し、そのテーマに従って学習を深める。
- ⑦学習旅行を通じて高校生活の一層の充実を図る。
- ⑧王室関係施設やワットなどへの訪問を通じて、相手を尊重した真の国際マナーを身につける。

(2) 事前・事後学習

1 年次

- ・「タイについて知ろう」(言語、歴史、文化など全般的な内容)
- ・タイ語講習会 I (身近なものからタイ語を学ぶ)
- ・個人テーマの設定について (特に「タイ」に特化したテーマを指定したわけではなく、各自に興味関心に従って設定させた。学習計画書は新年度になって提出。その後、ゼミクラスを組織して学習を進め、その成果を論文として 2 月末に提出。)

2 年次

- ・〈資料 1 - シラバス〉参照

III. 旅行実施までの経過

平成 15 年 3 月より、海外旅行を実施している学校への視察などを繰り返し、情報の収集に努める。

- ・ 6 月………教官会議、保護者理事会へ、タイへの学習

<p>第3日 11/17(水)</p>	<p>〈午後〉 蘭農園、バッキング工場見学 *マヒドン大学での講義をふまえて、蘭栽培の過程・日本への輸送過程などにおける、両国各々の課題や問題点を検討する。</p> <p>⑤世界経済の中のタイ王国 〈午前〉 タイ・デンソー、タイ・トヨタ工場見学 〈午後〉 BOI 訪問、講義 *日本企業におけるタイの存在を知り、また、タイの海外資本受け入れ戦略を学ぶ。</p> <p>⑥タイ王国の最高学府-チュラロンコーン大学- 〈午前〉 チュラロンコーン大学の研究室を訪問 〈午後〉 関係施設を訪問 *理学・工学分野の研究室を訪問し、タイにおける研究の最先端に触れる。</p> <p>⑦タイの人々の心のよりどころ-プミボン国王- 〈午前〉 ロイヤル・チトラダ・プロジェクト見学 〈午後〉 チトラダ・スクール訪問 *現国王であるプミボン国王の住まいであるチトラダ宮殿内の諸施設を訪問しタイにおける王室の意味について考える。</p> <p>⑧タイの政治・行政事情 〈午前〉 タマサート大学法学部 〈午後〉 タイ国外務省 *タイ王国の抱えている様々な諸問題をふまえ、タイの政治・行政の現状に迫る。 移動は貸切バスを使用。</p>
<p>第4～5日 11/18(木)～19(金)</p>	<p>午前・午後 アユタヤ遺跡群見学 → バンコク空港発 *クラス単位レベルのグループに分かれて見学。 *移動は貸切バスを使用。</p> <p>22:30・23:40 6:10・7:30 → バンコク空港発 → 成田空港着 JL-718 TG-642 (機中泊)</p>

(9) 生徒費用 97,776円(パスポート申請費用、任意保険は除く)

V. 活動内容報告

[1] 学校訪問

< 学校訪問概要 >

1. はじめに

タイ学習旅行を企画する際、まず頭に浮かんだのが学校交流であった。卒業生および相手校の方々の多大

なご尽力により実現し、感謝の念に堪えない。実際多くの生徒にとって、同年齢の若者との交流は大変刺激的で意味深く、思い出に残る体験となった。

2. 交流相手校の決定

我々の訪問を受け入れてくれた3校は、いずれもタイ国卒業生の紹介である。セントガブリエルカレッジ(以下SGとする)は22期のソムチャイさん、チュラロンコーン大学附属高校(以下CHとする)は23期のドゥシットさん、シーナカリン大学附属高校(以下SWとする)は25期のアチャラさんが、それぞれお子さんを通わせている学校であり、すでにこの方々を通じて訪問受け入れの内諾をいただいていた。この3人の方々には、連絡調整役また通訳として、実踏の際また当日に至るまで大変お世話になった。

生徒350人の訪問先は、準備のしやすさを考えてクラス単位で割り振ることにした。男子校のSGは女子受け入れの設備(トイレ等)が少ないことを考慮し2クラス(90名)、他の2校に3クラス(130名)ずつ受け入れていただくことで交渉を進めた。

3. 相手校との連絡・打ち合わせ

各クラスの訪問先が決定する2004年6月までは、交信が英語ということもあり、3校まとめて保戸塚が担当した。書状は正式の訪問依頼状のみで、それ以外はメールにより行った。実踏や本番の直前の緊急時には電話やファックスも使用したが、本校内からは送信できないため非常に不便であった。

具体的には2003年12月、3校の校長宛に附高校長からの挨拶状を郵送すると共にメールでその旨を伝えることから始めた。その後1ヶ月間どの学校からも返信がなかったが、附高側で学校交流の日を11月16日(火)と決定したので再び3校の校長宛その旨メールを送った。比較的スムーズに交信が進んだのはCHで、2度目のメール送信から1週間後に国際交流担当の先生から訪問受け入れの返事が来た。SWはメール、ファックス、電話ともうまくつながらず非常に苦労した。訪問受け入れの承諾が得られたのは2月半ばであった。また私立のSGでは、理事会がすべての決定権を持っており、しかも旧年度中は次年度のスケジュールが未定のため、訪問受け入れが承諾されたのは4月の理事会、その知らせがようやく届いたのは5月末であった。

4. 3月実踏

浅田、安井の2名でCHとSWを訪問。校内施設を見学させていただき、どのような形での交流会が可能

か、タイ側は何人の生徒が参加するのか等、担当の先生を交えて話をする事ができた。SGは先方の都合がつかず、受付にことづけるだけになった。

5. 生徒旅行委員会の動き

3校からの受け入れ承諾の返事がほぼそろった5月22日、学校交流に関する第1回旅行委員会を開催。各校の概要と交流のイメージを伝えた。6月4日、第2回委員会にて各クラスの訪問先を決定。決定に際しては、4名のタイ国生がそれぞれ3校に分かれるように、などの条件を考慮した。以後、委員会は3つの訪問先に別れて話し合いを行い、連絡も各校担当の教員に任せることとなった。附高側としては、生徒どうしでメールのやりとりを行い、準備を進めていくのが理想であったが、タイ側の意向は共通して教師主導であったためそちらに合わせる形となった。結果的には言語の壁、文化の違いに加え、互いの学校の長期休暇の時期がずれるという制約もあり、メールという極めて便利な通信手段がありながら、連絡の取り合いはかなり困難であった。生徒主体で行ったとしたら、あと半年ぐらい時間の余裕が必要だったと思われる。

6. 7月実踏

SGは安井・保戸塚、SWは井上・須藤、CHは根本・山川が訪問。顔を合わせての最後の打ち合わせとなるため、慎重に準備し、当日のプログラム、活動場所、昼食、服装等かなり詳細にわたり話を詰めた。

7. 訪問当日の手土産

学年で相談し、3校それぞれに以下の手土産を準備。
 ・木目込み人形
 ・生徒作品（美術、書道各1点）
 ・学校紹介DVD・日本の学校の教科書数点

< 訪問の実際 >

①セント・ガブリエル・カレッジ（A・B組）

1. 学校概要

Saint Gabriel's College：1920年、聖ガブリエル修道会により創立されたカトリック系男子校。小学校から高校まで12年間一貫教育を行う。生徒総数4667人、高等部は1014人である。

2. 当日までの準備

訪問受け入れの許可が一番遅かったセントガブリエル（以下SGとする）であるが、6月以降、担当のタニ先生とは比較的スムーズに交渉が進んだ。当日のプログラムについては、スポーツ交流や校内見学、昼食をとりながらの交流等こちらの要望を取り入れてタニ

先生が早々に原案を作成して下さったので、それをもとに効率よく話し合いができた。

附高側で主に準備したのは、プレゼンテーションの内容、および昼食会での出し物であった。旅行委員を中心に、A・B各組でアイデアを募った。生徒は初め、「日本文化紹介」＝「歌舞伎など伝統芸能の紹介」をイメージしていたようだが、むしろ自分たちの日常の様子を伝えた方がよいと考え、デジカメ写真をスクリーンに映しての学校紹介、および全員での合唱を披露することにした。日本の学校では盛んな合唱であるが、タイではあまり行われなそうである。またB組の男子生徒が空手の型を見せてくれることになった。こう書くと準備はごく簡単のように思われるが、これだけでもかなり大変であり、また先方の設備などメールだけでは詳細がわかりにくい部分も多く、さらに直前になって細かい変更が次々に伝えられ、旅行委員と教員はやや不安を感じつつ当日を迎えた。

結果的には準備した出し物すべてを披露することができ、相手の方々に喜んでいただけるものとなった。一般にこのような交流会ではせっかく準備しても時間や設備等の都合により予定通りいかないこともある。招かれる側としては、「どうなるかわからないが一応準備しておく」というつもりで臨むのである。このニュアンスを生徒に理解させるのは難しく、実際理解させてはいなかったと思う。うまくいったよかった。

3. 当日のプログラム

8:20	学校到着・歓迎式典・プレゼンテーション（SG講堂） 両校校長挨拶 / 生徒委員紹介 / SG・SF生徒挨拶 / 附高生挨拶 / 学校紹介
9:30	文化体験活動（SG・SF校内各所） ゲルキャンドル製作 / タイのお菓子作り / タイの伝統的な遊び / 民族衣装試着
11:00	スポーツ交流（SG・SF体育館） 男子：サッカー・バスケットボール 女子：ムカデ競争他
12:00	昼食会・カルチャーショー（SG講堂） SG：民族音楽演奏 / ムエタイ実演 SF：民族舞踊 附高：琉球空手 / 合唱（『空も飛べるはず』『世界に一つの花』）
13:00	終わりの会 プレゼント交換 / お礼の言葉

交流会は隣接する女子校・セントフランシスザビエル（以下SFとする）との共催により行われ、一層華やかで思い出深いものとなった。

4. 生徒の様子

男女ペアでバスから降りた附高生を、1列に並んで出迎えエスコートしてくれたのは、ちょっとはにかんだ笑顔のSG生、そしてお下げ髪にリボンの、いかにも品のいいSF生。ワイ（合掌）と蘭の花の歓迎に、附高生の感情は一気に高揚し、あとはもう夢の世界の半日であった。

この日生徒たちが体験したのは、異国で初めて出会った高校生との言葉の壁を超えた触れ合い、優しさと思ひやり溢れるもてなし、伝統文化が日常に息づくタイという国、西洋化した日本、英語が話せないもどかしい自分。そして私が確認したのは、生徒たちの、出会いを楽しむ素直で前向きな姿勢、相手の気持ちに応え感謝する心、踊りの輪に思わず引き込まれる異文化の魔法、そして2カ国語を自在に操り飛び回る小さな大使・タイ国留学生Nの姿だった。



②シーナカリン大学附属高等学校（C・E・F組）

1. 校名について

正式名称は「サーティット・シーナカリン・ウィロート大学パトゥムワン校」で、サーティットが「附属学校」を意味しパトゥムワンが本学で言う「世田谷」校舎（本校）の部分にあたるらしい。

2. 一日の流れ（於校庭：中庭）

バスを降り、中庭に通され、相手校副校長カノックワン先生・学校交流担当教員ドゥアンチャイ先生をはじめとする多くの先生方・生徒たちの歓待に驚かされる。

当初、120名前後の生徒が相手をしてくれるとの事

であったが結局、授業を返上しての全校行事となってしまったようだ。

1) セレモニー

- ・シーナカリン大学附属高校校長挨拶（ピタック校長）
- ・記念品交換（井上）
- ・相手校生徒代表挨拶（歓迎の言葉）
- ・本校教員（福元）挨拶

＜タイ語通訳：C組タイ国留学生＞

- ・本校代表生徒挨拶（C組タイ国留学生）（F組旅行委員代表）

2) スポーツ交流試合（男女代表選手によるバスケットボールのゲーム）

※男女共それぞれ20～25分間程度

全校生徒が鈴なりの状態で声援を送る中、エンターティナー（相手校教員）の盛り上げで最高潮に達する。両校生徒の異常なまでの盛り上がりを見てあらためて“スポーツ”が言葉を超える交流手段であることを知らされた。

☆スケジュール的な問題であるが、ウォーミングアップの時間をあまりとらずに開始に至ったのはやはり反省すべき点と考える。

3) 文化交流（文化紹介・発表）

- ・（相手校）タイ民族舞踊
- ・（本校）日本の伝統文化を中心に紹介

＜凧あげ浴衣、独楽、剣道、尺八、囲碁等＞

相手校の洗練された民族舞踊に見入ってしまった。授業の一環として行われているとはいえ、美と雄（勇）を素晴らしく表現する姿はとても素人の高校生とは思えず、タイ王国の威信を守った出来映えであった気がする。

一方、本校生の紹介については事前の準備不足は否めず演技自体は粗末であったが、しかし、相手校生徒が非常に興味を持ったものもあった。基本的に日本古来のもので多少動きを伴う催し物には特に関心を示していたように感ずる。（凧あげ、独楽、剣道など）

4) 文化体験活動

タイ王国の伝統的なスポーツ（セバタクロー）をはじめタイのお菓子作り、舞踊、楽器演奏等を専門の先生方のもとで楽しく学ばせていただいた。

途中、タイ王国では滅多にないとされる突然の雨にもめげることなく英会話、そして身振り手振りによる交流も無事終了。

5) 昼食会

教員、生徒それぞれに分かれ学内の食堂にて昼食タイム。すっかりうち解けた雰囲気の中で最初で最後の会食となった。

6) プレゼント交換会

時間に追われ、非常に慌ただしい中でグループ毎にささやかなプレゼントの交換を行った。相手校より贈られたビニールバッグはその日のミーティング後、訪問者全員に配られた。

3. 総括 (感想等)

学習旅行後のアンケートからも、大半の生徒が多大なもてなしと優しさに感動した様子を伺い知ることができる。両国生徒の頼みの綱は英会話。うまく話せぬ自分に腹立ちながらも、しかし結局は笑顔と思いやりで全く問題なく心はつながり伝わっていった。

見送りと称して我々のバスにちゃっかり乗り込むお茶目な一面に青春の奔放さを感じる。日頃、首飾りなど全く興味を示さぬ男子生徒たちが、頂いた花の首飾りをホテルに到着するまで誰一人としてはずすことなく大切に持ち帰った。それは花びら一つ一つに生涯忘れることのない思い出が詰まっていたからに違いない。

学校訪問 (交流) 実現までの連絡手段はメールのみ。頼りのメールもなかなか返事は来ず、来てもその都度内容が変わり、と・・・・とにかくやきもきする中で迎えた学校訪問ではあったが、本校生も無我夢中で頑張り成功へと導いてくれた。

あとやはり今回、タイ王国留学生Kの存在は大きすぎた。もし彼が居なかったら、そう考えるとぞっとするのも事実である。



③チュラロンコーン大学附属高等学校

(D・G・H組)

1. 学校概要

Chulalongkorn University:1958年6月1日開校。中学3年間・高校3年間計6年間の一貫教育を行う男女共学校である。中学及び高校で生徒数は1424名で、各学年7クラス、一クラス生徒数はおよそ34名である。

2. 当日までの準備

まずはじめに、今回の学校訪問を実りあるものにするのができたのは、チュラロンコーン大学附属高校 (以下CH) 側の直接窓口にあたって頂いた鹿島先生、校長先生、副校長先生、準備及び当日支えて頂いた多くの先生方のおかげである。前日も先生方及び係生徒の多くがほとんど寝ずに準備をして頂いたことを聞き、心よりの感謝の念が起るとともに胸が熱くなった。

準備は順調に進んだとは決していけない。その一番の原因として連絡の困難さが挙げられる。なるべく早く開始しかつ効率的な準備を行うためには密な連絡体制の確立が不可欠であることを実感した。初めての海外への学習旅行、文化風習の異なる学校との連絡は困難を極めた。その困難さのゆえに生徒への情報を与えるタイミングが遅れてしまい、結果以下に述べるような反省点を生む結果となった。

当日のプログラムについてはCH側主導で作成された。そこで決定されたスケジュール、またCHからのリクエストに応える形で附高の準備を進めていった。

附高で準備をしたのは主に文化交流である。生徒は当初スポーツを含めたものを希望していたが、それはCH側からのリクエストならびに時間的な制約から叶えることはできなかった。最終的には剣道、書道、わらべうた、折り紙、あやとりである。もっと早く生徒達に当日のスケジュールを知らせることができれば生徒達のモラルはより上がったと思われ非常に悔やまれる。しかし当日スケジュールが変わっているというなかではやむを得ない面もある。ただし、これはCH側が我々をできるだけ歓待したいという気持ちの結果であることは強く述べておきたい。準備期間及び密度と生徒達の満足度には相関関係があるようである。その意味において確かにCH主導の今回のようなものは有り難いと思う反面、附高生徒に満足感・達成感を味あわせるにはそぐわない。やはりより準備期間をとりまたチャレンジなものの方が良いと思われる。それには旅行委員になぜこの学校交流を行うのかを自

覚させ、それを全体生徒に広め、一人一人のモラルを高める必要がある。また附高の学校到着時間が交通事情および人為的問題のために遅れてしまったため、生徒達に配当された時間が減ってしまったことも生徒達の満足感を減少させてしまったことだろう。

3. 当日のプログラム

- | | |
|-------|--|
| 8:30 | 学校到着・歓迎式典（体育館）
CH 校長挨拶 / 附高学年主任挨拶 / CH 生徒挨拶 / 附高生挨拶 |
| 9:00 | 文化体験活動（体育館）
タイの伝統的武術披露 / タイのバンドショー
（ドラえもん歌、民族舞踊：附高生とともに） |
| 9:30 | 附高日本文化紹介（体育館）
剣道披露 / 休憩 / 剣道・書道・あやとり・わらべ唄・折り紙
（アリーナで各グループにCH生徒が参加） |
| 10:00 | 文化体験活動（各教室グループ毎にツアーリング形式）
タイのお菓子 / タイのデザート / タイの衣装・伝統舞踊 / タイの伝統楽器 |
| 10:30 | 意見交換（英語） |
| 11:00 | ランチ |
| 12:00 | 終わりの会
プレゼント贈呈 / お礼の言葉（附高生代表） |

4. 生徒の様子

初めて会ったタイの生徒と手を繋いでのダンス、アリーナに降りての手と手を取り合っただけの交流に生徒達は照れながらも楽しんでた。パフォーマンスを中心とした文化交流もいいが、今回のようなお互いの息吹を感じることができる距離の交流もまた良いと思われた。

〔2〕バンコク市内見学

見学場所については、先の「旅程」を参照されたい。いずれも、いわゆる観光スポットであるため、詳しい説明は割愛させていただく。生徒の様子については、「旅行後アンケート」参照。



ワット・アルンにて



ワット・ポーにて



ワット・プラケオにて

[3] コース別研修

＜コース別研修の目的と概要＞

タイ学習旅行3日目のコース別研修は、現在のタイの様相を多角的にアプローチし、タイの政治・経済・社会および国際社会の中のタイ、日本とタイとのつながりを実感できるよう設定されたものである。このコース別研修は、タイ学習旅行の根幹をなすものであり、かつ多くのタイ王国国費留学生を受け入れてきたという本校の特性から、多くの卒業生の協力により設定が実現した、本校ならではのオリジナリティあふれるものとなっている。内容的には、省庁・大学・研究所・日系企業、日本と関連のある農園・社会福祉施設等を訪問し、研修するという設定になっている。今回は8コースを設定、実施した。具体的な各コース概要は以下の通りである。

1. エネルギーの未来をみすえて

—タイと日本の共同研究—

NSTDA 管轄下の SciencePark 内研究機関 MTEC に所属する太陽電池研究所と隣接するタマサート大学理学部・工学部に訪問、研修を行うコースである。

太陽電池研究所は、タイの気候的特性を生かしてクリーンエネルギーである太陽電池の活用を研究しており、また東京工業大学との共同研究を実施していることでも知られている。

タマサート大学は、タイの政治運動の中心ともなった大学として知られるが、近年理系学部が充実し、バンコク郊外のドンムアン空港近郊に広大なキャンパスに研究施設を移し、研究活動を活発化させている。本校の卒業生が数名タマサート大学の教員に就任していることから、現在の研究事情および実践を視察させてもらうコースを設定した。

2. 共生の時代をみすえて

—タイの社会福祉・病院事情—

3つの社会福祉施設(シーサンワン学校・バックレット障害児ホーム・ThaiWithDisability

Foundation) と、バンコク市内のバムルンラード国際病院を訪問し、生徒が考案した遊びによる障害児との交流も含めた研修を実施するコースである。

i 実用化にむけた研究の推進をおこなうために設立され、国公立研究所や大学研究室、民間研究所を結びつける役割を果たしている。

ii 50年の歴史をもつ肢体不自由児の学校。

iii 脳性麻痺などの障害をかかえる7～18歳の子供達が入所している。

iv タイ障害者財団(ThaiWithDisabilityFoundation)が運営し、日系企業のデンソーが出資するNPO「WAFCAT」が支援している社会福祉施設。

v バンコクにある私立の国際病院。最先端技術や、充実したサービスを誇り、世界各国より患者が集まることで知られている。また、社会活動も積極的に行い、タイ社会との連携を図っている。

3. 繊維が結ぶ日本・タイの関係と実用化研究

タイにおける日系企業、帝人の工場見学および、NSTDA 管轄下の SciencePark 内研究機関 Biotec における実用化にむけたバイオテクノロジー関連の研究を視察・研修するコースである。研究成果を実用化し、製造している日系企業の状況および、積極的に対政府が実用化研究をバックアップしている現状を視察できるコース設定となっている。

4. 日本とタイを結ぶ蘭の花

—環境と人間のライフサイクル—

マヒドン大学環境資源学部の教員であり、本校の卒業生でもあるゴップギャウ氏の「対の環境資源と諸問題」に関する講義と、品質の高い蘭を製造し日本へ輸出しているバンコク近郊の蘭農園・バックキング工場を見学するコースである。タイより日本に多く輸出されている蘭の花、その蘭の流通だけでなく、開発および蘭栽培地域の抱えている環境問題まで視野に入れたコースである。

5. 世界経済のなかのタイ王国

タイにアジアの生産拠点をおくタイトヨタとタイデ

ンソーの工場を見学し、こうした日系企業をはじめとする海外からの投資をあつかうBOI（タイ王国投資委員会）を訪問・研修するコースである。通貨危機を乗り越え、経済成長著しいタイの経済政策と日本との関連を実感してもらえよう設定したコースである。

6. タイ王国の最高学府 —チュラロンコン大学—

チュラロンコン大学の理学部分野、工学部分野の見学・講義と、キャンパス内の大学生の生活を見学するために設定されたコースである。理学部分野では、微生物・化学・海洋生物に関する施設を、工学部分野では、近くのデパートの屋上に設置された太陽電池の試用状況を見学するコースとなっている。

7. タイの人々のよりどころ—プミポン国王—

タイの人々が畏敬の念を抱いているプミポン国王の推進する王室のプロジェクト研究およびチトラダ宮殿内の学校を訪問するコースである。

8. タイの政治

タイの政治運動で中心的役割はたしたタマサート大学およびタイ王国外務省を訪問するコースである。タマサート大学の歴史を通して、タイの政治を学び、またASEANの中心国であるタイの外交を学ぶことで、国際社会へ目を向けて欲しいと考えた。

1. エネルギーの未来をみすえて

(太陽電池研究所、タマサート大学理学部・工学部)

(1) スケジュール

- 9:00 太陽電池研究所到着
挨拶及びNSTDAに関する講義（英語）
- 9:30 太陽電池について講義（日本語）
- 10:00 休憩
- 10:10 太陽電池研究所ツアーリング（英語）
- 12:00 昼食
- 13:00 タマサート大学到着
理学部にてヨンサックさんの研究についての講義及び実際に顕微鏡を覗いて実験に参加（パパイアとタンパク質の反応）
- 14:00 工学部にて全員にタマサート大学について説明
- 14:30 2グループに分かれ一方がチャチャイさんの流体素子を利用した散水の自動化の研究

講義を聴き、もう一方がJICAから支援を受けた研究、流体実験、風洞の実験施設、マイクロ派研究、材料研究室等の施設を見学させて頂いた。



(2) 訪問先の概要及び生徒の様子

まずNSTDAの講義室にて、挨拶及びNSTDAについての講義が英語で行われた。すべて英語で行われたが生徒達はよくついていったと思う。一人一人の目は非常な集中力の光に満ちていた。しかしその後日本語で太陽電池について説明が開始されると状況は一変し、その集中力が減退したことは否めない。実際に講義者からその集中力の減退をたしなめられる場面があった。それからお茶とお菓子を頂きながら談笑して休憩をした。その後現物の太陽電池を前に説明を頂いた。生徒達の目はいつもの集中力に満ちたものになっていた。その次に太陽電池の製造過程を見せて頂いた。解説は英語で行われていたが、非常に積極的な態度であったと思われる。

今回この二つの施設見学場所において生徒達は非常に対照的な反応を示した。これを考察しておくことは今後の施設見学のアレンジングに非常に資すると思われる。まず第1点目として生徒達に前もって予備知識を与えた方がいいということである。これは実は非常に難しい問題を内包している。それは何故かということあまり生徒に予備知識を与えすぎてしまうと当日の集中度が減退してしまう。しかし今回のような太陽電池というものについてはもう少し予備知識があったほうが良かったように思われる。第2点目として、これは当校の特色かもしれないが、講義を行って頂くなら、パワーポイントなどの視聴覚機器を使用して頂くという条件付きで、基本的には英語で行って頂いたほうが

良いように思われる。そのほうが生徒は集中力が持続するようである。つまり楽なものよりもチャレンジングなものほうが生徒達はより一所懸命になるのである。第3点目として、講義形式よりもツアーリング、特に実際に手を使ったもののほうが良いように思われる（今回はヨンサックさんのパパイアとタンパク質の反応の実験に参加するために顕微鏡を覗いたことがあった）生徒達が嬉々として顕微鏡を覗いていた姿が印象的であった。

(3) まとめとして

今回の施設見学で参考になったのは、しっかりと生徒達に予備知識を獲得させることの大切さである。それにより当日の理解度が深まり、また参加態度も積極的なものになる。受動的態度から能動的態度になるのである。しかし先に述べたが何をどれほど準備させればいいのかはそのトピック等により異なるためこれは簡単なことではない。

そして、わが校の生徒にはやりがいがあるものであればあるほど、それに対して一所懸命に取り組んでいく。またなるべく頭と目と耳と口と鼻と手を総動員するようなものが好ましい。その時に附高の生徒達はその真価を発揮することであろう。

最後に一番大切なのは施設側との連絡を密に取ることである。今回 NSTDA の担当者は英語を話さない人物であった。そのためどうしても連絡にタイムラグが生じてしまう。そのため出国前に生徒からの質問を受けてもそれをすぐにフィードバックすることができなかった。つまり今後連絡系統の確立の際には必ず密な連絡を取ることができる系統の確立に心がけるべきということだ。これは私自身が今後施設見学をコーディネートする際に心がけたいことである。

2. 共生の時代を見据えて

—タイの社会福祉・医療事情—

(シーサンワン学校、パッケレット障害児ホーム、タイウィールファクトリー、バムルンロード病院)

本コースは標題の通りタイの社会福祉施設と病院を見学することで、日本のそれと比較する視点を持たせる目的で開設されたコースである。ノンタブリ県パッケレットにある「シーサンワン学校」・「パッケレット障害児ホーム」・「タイウィールファクトリー」という社会福祉施設3ヶ所と、バンコク市内の国際病院「バムルンラ

ド病院」を訪問し、見学を行った。参加生徒は、この方面に興味のある者を中心とする35名（男子14名、女子21名）で、引率教員は福元と、浅田である。

(1) スケジュール

- 6:00 朝食開始
- 6:30 ホテル出発
- 8:20 シーサンワン学校到着
- 8:30-9:30 シーサンワン学校見学
(徒歩で移動)
- 9:40 パッケレット障害児ホーム到着
- 9:40-10:00 ホーム内見学
- 10:00-11:00 子供たちとの活動
- 11:00-11:20 職員の方との質疑応答
(徒歩で移動)
- 11:30 タイウィールファクトリー到着
- 11:30-12:00 施設見学
- 12:00-12:20 WAFCAT の説明
- 12:30 出発
- 13:30-14:10 ラマガーデンホテルで昼食
- 14:20 ラマガーデンホテル出発
- 15:00 バムルンロード病院到着
- 15:10-17:00 講義・見学
- 17:00 バムルンロード病院出発
- 17:30 ホテル到着

(2) 訪問先の概要と生徒の様子

本コースは標題の通りタイの社会福祉施設と病院を見学することで、日本のそれと比較する視点を持たせる目的で開設されたコースである。

現地旅行会社の事前の提案では、バンコク市内の渋滞は極めて激しいため、朝は6:15に出発するべきだという話だったが、それは引率上かなりの困難を伴うことと、後述する大野純子氏のアドバイスもあって、6:30ホテル出発という計画でこれを進めた。実際には、間に合わないどころか7:30に現地に到着してしまい、時間を潰すのに困ったくらいである。幸いなことに、生徒はシーサンワン学校の朝礼に加えていただき、障害児たちが車椅子で教室に入る時の介助を手伝わせていただく幸運に恵まれる結果となった。その他はほぼ予定通り進んだ。

次に、各訪問施設の概要を述べる。

「シーサンワン学校」は、肢体不自由障害児学校である。日本で言えば、たとえば筑波大学附属桐が丘養

護学校のような学校である。小学校～高等学校程度の児童生徒が在籍し、児童生徒はほぼ全員が車椅子で移動するが、中には校内の病院に入院してほとんど動けない子もいる。異なる階はすべてスロープの廊下でつながっており、車椅子での移動がしやすくなっている。校内には、授業を行う教育施設と、病院やリハビリ室などの医療施設を併せ持っている。授業の時間割の他にリハビリの時間割があり、リハビリ室には理学療法士の先生が、担当の子供に応じた時間を組んで割り当てられている。子供たちが楽しく機能回復訓練を受けられるような工夫が随所に見られ、意外なほど明るい印象である。



「バックレット障害児ホーム」は、シーサンワン学校から徒歩5分ほどのところにある。シーサンワン学校と同様に教育施設と医療施設を併せ持っているが、シーサンワン学校が「教育+リハビリ」であるとするれば、こちらは「リハビリ+教育」である。子供たちの年齢はほぼ同様だが、シーサンワン学校に比べ、脳性麻痺を伴うなどの重度の障害児が多く、家庭的にも恵まれない子供たちが多い。一方、車椅子の子の割合は少ない。本校生徒はここの子供たちと、体を動かすことを中心とした交流活動を行った。(後述)

「タイウィールファクトリー」は、コース別研修⑤の訪問地の日系企業であるデンソータイランドが出資して設立している「アジア車いす交流センター(WAFCA)」が運営母体となっている。当日は、このタイ現地事務所である「WAFCAT」の大野純子氏に、バックレットの3施設を案内していただいた。タイウィールファクトリーは、障害者の自立支援施設で、自らも車椅子の利用者である人々が、障害者のために車椅子を製作する工場である。ここではその製作の過程と実際の作業を見せていただいた。説明も、英語で

直接伺った。

「バムルンラード病院」は、バンコクにある総合病院で、「アジア初の国際病院」とうたわれている。日本の病院に比べ、タイでは「サービス」としての面が強く、高いサービス内容に応じて患者が世界各国から集まってくるという。この病院に着くとまず目を引くのが、1階総合案内のロビーの所にある「スターバックス」である。エスカレーターで2階に上がると、そこにも「マクドナルド」や、日本料理レストラン、西洋料理レストランなどがあり、3階に上がって初めて病院の受付となる。このように、日本の病院とは異なる公共的な空間を持っており、加えて医療そのものもサービス精神が豊富である。たとえば、受付には日本語・韓国語・中国語・英語の通訳スタッフが常駐しており、言葉の異なる患者でも安心して医療が受けられるように配慮されている。医師も、当該言語に堪能な医師が配置されている。また、小児科の外来診察スペースには、「Kid Zone」という子供の遊び場があるほか、診察室内部やその前の廊下・天井に至るまで、人形や絵などで子供が嫌がらない雰囲気を作っている。最上階には「～スイート」という類の、VIP用の個室が用意されているなど、まさにサービス精神豊かな病院である。ただし、タイには国民健康保険制度がないため、誰でもここで医療を受けられるわけではない。その意味で、貧富の差についても考える場になった。

さて、本コースでは、何といてもバックレット障害児ホームでの、障害児との交流会が最大の企画であった。実践の時に我々が現地で行われたこと(たとえば、折り紙は手の不自由な子もいるのでできない、とか、全身を動かしてリズムをとるゲームがいい、など)に基づいて、リーダーを中心に交流内容を考えた。その中心になったのは、「パンダ・うさぎ・コアラ」と「ばくだんゲーム」である。

「パンダ・うさぎ・コアラ」は歌に合わせて振りをつけるゲームで、

おいで、おいで、おいで、おいで、パンダ、パンダ
といった歌詞に、こちらへ招く動作や、パンダらしく手で輪を作り目の周りに置く、などの動作を入れるもので、本番は歌詞を事前に訳しておいたタイ語で実施した。

「ばくだんゲーム」は、全員が円になるように(タイ人・日本人交互に)座り、音楽が鳴り出したら1人が持っているボールを隣へ送っていき、音楽が終わったときに持っていた人の負けとするゲームである。負

けた人には、罰として動物の耳のおもちゃをつけてもらった。

障害があり、しかも言葉の通じない子どもたちと本校生徒が、一緒になって楽しみ、笑い合う場面は、引率者としての感動を覚えるものであった。お別れの時が来ても、お互い名残惜しくてなかなか集合できずにいたが、予定さえ詰まっていなければ、もう少しそこにいさせてあげたいと感じた。なお、最後は日本からあらかじめ折って持参した折り紙や紙風船を、プレゼントとして差し上げて別れた。ホーム内の売店には障害児の作った品物も売っており、これを購入する生徒も多かった。

バムルンラード病院では、病院の日本人スタッフである松田真千代氏のコーディネートで、

1. Dr. Chartree (バムルンラード病院 CMO 最高医療責任者) による歓迎スピーチと、スライドを使っ
ての病院の概要オリエンテーションおよび Q & A
(すべて英語)
2. 日本人顧客サービス部マネージャー田村氏・松田
氏による院内ツアー

の2点を実施していただいた。全体で約1時間半ほどであった。先に述べた施設の他、病院内の一般の食堂、一般外来診察室、新生児室、病院のベランダ(横長で数百メートルあり、噴水や休憩用の東屋などがある)をも案内していただいた。生徒の率直な感想は、「こんないい病院、日本にはない!」であった。

(3) 総合的に

本コースは「共生の時代」を間近に見て取れるものとなった。障害児との交流や、障害者自律施設の見学、公共性の高い病院の見学を通し、障害者と健常者、患者と健康な者が、よりよい形で関係し合う社会—これはいわゆるノーマライゼーションばかりではないと考えるが—の実現に向けてのヒントを得られたものと思われる。これは日本では必ずしも進んでいない分野である。今回のコースに参加した生徒たちが、将来この方面で活躍してくれたら、望外の喜びである。

3. 繊維が結ぶ日本とタイの関係

(テイジン工場、BIOTEC)

(1) スケジュール

9:20 帝人 (TPL) 着

ウエルカムスピーチ、概要説明 (英語: 約

20分)の後、4グループに分かれて工場見学。
見学後、質疑応答。生徒代表挨拶 (英語による)。

12:00 昼食 (ラマガーデンホテル)

14:00 BIOTEC 着

概要説明 (英語: 約1時間)の後、微生物・環境 (塩害に強いイネの開発等) のいずれかを選択し、2グループに分かれて見学。
見学後質疑応答。

(2) 訪問先の概要

- ① TEIJIN POLYESTER (THAILAND) LIMITED (本社: タイバンコク) は帝人株式会社のグループ会社でタイにおいてポリエステル繊維の製造販売を行っている。TPL はタイの安全賞として権威のある「Thailand ESH* excellent company」を2年連続で受賞し、優れた企業として期待されている。
(*ESH=Environment, Safety, Health) この賞の受賞企業数はタイ企業11万社中の180社、日系企業3千社中の22社であり、信頼されている企業といえる。

- ② BIOTEC (国家遺伝子工学バイオテクノロジーセンター) は科学技術環境省 (MOSTE) 所管の国家科学技術開発庁 (NSTDA) の4センターの1つであり90%が政府からの資金で運営されている。BIOTEC は動物細胞培養、バイオアッセイ、バイオ素材、生物資源研究、カルチャーコレクション、発酵・バイオケミカルエンジニアリング、フードバイオテクノロジー、分子生物学、モノクローナル抗体、菌学、植物細胞技術、蛋白工学など15の研究室から構成される。

(3) 訪問先での学習及び生徒の様子

総員34名 (男子7名、女子27名)、第1希望で選択した者は少ない。興味のない生徒の見学の態度を心配していたが、当日の学習態度は意欲的であった。ポリエステル工場見学は暑くかなりたいへんであったが、見学態度は良好、繊維が出来上がる工程では歓声もあがった。

BIOTEC においては各研究室を熱心に見学し、研究者をつかまえて質問する光景が多く見られた。若い研究者の方々が自分の仕事に誇りを持ち、意欲的に取り組んでいる姿に生徒は感銘を受けていた。英語による説明が多く、はじめは多くの生徒が困惑していたが、帰国生の通訳により研究内容の理解だけでなく質疑応

答も円滑に進んだ。

TPL も BIOTEC も説明や講義が英語であり、理解できない生徒も半数はいたようであるが、寝ることもなく必死で聞こう、理解しようとしていた態度は立派であった。

4. 日本とタイを結ぶ蘭の花

(マヒドン大学環境科学部、ラン農園)

(1) スケジュール

- 9:00-9:15 学部長あいさつ
 9:15-10:00 講義 (ゴップギャウ氏)
 10:00-11:00 学部見学
 * 3つグループに分かれて見学
 * 各グループにタイ学生 (5~10人)
 の案内
 11:00-12:00 昼食+ (青空市場、大学生協など)
 12:00 バス集合 マヒドン大学発
 13:00-16:00 農園見学
 ・ラン農園-大量栽培-
 柳瀬氏 (日本語)
 ・ラン農園-特殊栽培-
 ジヨム氏 (タイ語)、柳瀬氏 (日本語)、ゴップギャウ氏 (日本語)
 ・パッケージ工場
 柳瀬さん (日本語)

16:00 バス発

(2) 訪問先の概要及び生徒の様子

〈午前〉マヒドン大学環境科学部

①学部長あいさつ

(主旨)産業の発展とともに、例外なくタイにも環境問題が生じており、それに対応するために大学に環境科学部が設置された。また、環境問題は非常に複雑で、単一の研究分野では成り立たない。自然科学の多くの分野と政治・経済等も含め研究者のネットワークが重要である。これまでの大学以上に分野間の連携を図りながら研究をしていかなければいけない。日本の環境問題対策の技術や成果も大いに参考にしている。学大附属高校卒業生の研究者が重要な位置で活躍している。

学部長のタイ語をゴップギャウさんが日本語に通訳する形で行われた。国からの使命を受け、学部全体が確固たる目標に向かって真摯に環境問題

に取り組んでいることが強く印象づけられた。

②講義 ゴップギャウ氏 (卒業生)

(内容)・環境科学の概要

- ・マヒドン大学環境科学部の具体的な研究
- ・各研究分野の連携
- ・環境科学を専攻する学生

環境科学を専攻する学生が、どのような講義・実習などの基礎学習を経て、それぞれ専門研究を行っているのか、また各分野間でどのように連携をとっているのかを、プレゼン形式で講義してくれた。学生には、長期で行われる数回の野外実習を含め多くの実験・実習が必修として課せられているなど、基礎学習では自然を知ること重点がおかれているとのことであった。

③学部見学

実際に実験室に学生が研究を行っている様子や図書館、大学生協をタイの学生に案内で見学した。説明は英語であるが、言葉は通じない部分も多かったようである。しかし、実験室・研究室は器具やサンプルを目の前にしているので雰囲気は伝わっていたようである。内容としては、日本の大学の理系学部(化学・生物系の学科)でみられるようなものが多かった。実験室・研究室に限ればタイと日本の違いを大きく感じることはなかったと思われる。図書館では、大学とはいえ、タイ語の文献よりも英語の文献が多いことに複雑な気持ちをもったようである。

④昼休憩 (食事・青空市場)

毎週水曜日、広大な大学の駐車場の一角に、たくさんの飲食物・雑貨・衣類の出店が並ぶ青空市場が開催される。学生はそこで昼食をとったり簡単な買い物をしたりして休憩時間を楽しんでいる。昼食のあと、多くの生徒が学生に誘われて青空市場に遊びに行った。旅行中、買物の時間がなかなか取れない中、30分程度の短い時間ではあったが、生徒は非常に元気に買い物を楽しんでた。この時間がこの日一番の盛り上がりだったのは、引率者としてうれしいながらも少々複雑な思いだった。

〈午後〉ラン農園見学

⑤ラン農園 (大量栽培)

少ない種類のランを大量に栽培する、縦800mもある広大な農園をゆっくり歩きながら見学した。このランは主に輸出を目的としたものである。農園の関係者である日本人の柳瀬氏が、マイクとアンプと持って歩きながら、ランの特性、タイの気候、タイ

の産業としてのラン等について説明してくれた。わかりやすく非常に興味のひかれる内容であり、生徒は聞きもらさないようにガイドについて歩いていた。

⑥ラン農園（特殊栽培）

数は少ないが、多くの種類のランが栽培されている、品種改良等の研究をする農園を見学した。この農園は、各ラン栽培農家に対して、それぞれの農地にあった品種や栽培方法の紹介や指導をするサービスも行っており、タイのラン産業のアドバイザーなような役割を持つ農園である。



同様の農園がいくつかあり、それぞれが戦略的にラン研究を行っており、研究情報は互いに公開していないとのこと。この性質上、普段は一般には開放されない農園に入り、説明を受けることができた。この貴重な機会に感謝しつつ、世界のランコンクールで入賞したランをはじめ、美しく珍しいランを見学することができた。生徒はメモを取り熱心に質問していた。

⑦パッケージ工場

世界のランの大部分はタイ産である。収穫されたランは、その品質を落とさずに世界中に空輸しなければならない。手作業で飛行機の乾燥に耐えられるように処理され、次々と箱詰めされる様子を見学した。製品として綺麗に整えられた大量のランを見学し、ランの花弁でできた腕輪をお土産いただき、充実したコース別研修を締めくくった。

(3) 全体的に

ゴップギャウ氏をはじめマヒドン大学が用意してくれたプログラムは、充実したものであった。また、午後のラン農園見学はガイドの方が熱心に案内してくれ

て、生徒は興味を持って見学できたようである。予定どおり日程を終えた。

連日のハードスケジュールもあり、生徒は大分疲れていたようである。当日、予定よりも早く大学に到着したため、バスで1時間の休憩を設けた。それでも講義中に眠ってしまう生徒が数人おり、歓迎し精一杯のもてなしをしてくれた大学の方々に対して、申し訳ない思いであった。

5. 世界経済の中のタイ

(タイ・トヨタ、デンソー・タイランド、BOI)

(1) コース設定の経緯

本校卒業生の伴様よりタイの日系企業であるデンソーで長年勤務されている政岡様を御紹介いただいた。その政岡様よりタイのトヨタ、WAFCATなどをさらにご紹介いただき、タイ国で活躍する日系企業というコースができあがった。また、「外国資本の受け入れを審査するタイ国の機関であるBOI（タイ国投資委員会）に日系企業に関するお話を聞くことができれば、コースとしてより充実する」ということが持ち上がった。幸運なことに、本校の卒業生も多数勤務されていることもあり、受け入れを快諾していただいた。

このコースを希望する生徒は36名。教員は、井上と公民科の津田の2名で担当した。「経済」についての一般的なガイダンスを津田が担当し、その他にも事前学習として、BOIについての調べ学習を課した。

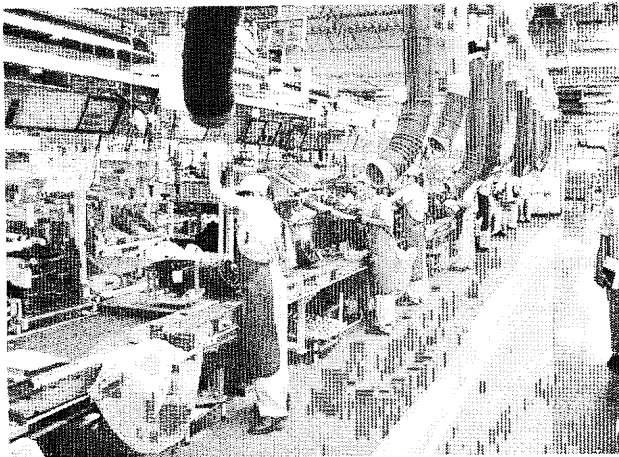
(2) コースの概要及び生徒の様子

①タイ・トヨタ

タイ国に進出している自動車産業は多いが、トヨタは全体の36%のシェアを占めている。特に、自動車にいたっては全体の50%のシェアを誇っている。現在、1トンピックアップの開発競争がもっともさかんな時期であるが、その開発がちょうど終わり生産ラインに乗っている現場を幸運にもわれわれは見学することが出来た。これは、日本では不可能なことであろう。工場で扱われる部品は、隣接する現地の日系企業や現地企業からほとんど供給され、効率的に生産されている。デンソーや矢崎総業、旭硝子、松下電器、ブリヂストンなど日本の有名企業がそうである。工場見学後、今までにご苦勞されたこと、今後の方略などについて御話をうかがうことができた。

②デンソー・タイランド

日本電装である。現在、タイ国内でも工場の地域を拡大したり、インドネシア、マレーシア、フィリピンなどアジア隣国にも、部品生産のために工場進出を果たしている。タイのトヨタにもエアコンデシヨナー、スターターなどの自動車部品を供給しているが、WAFCATといった福祉事業への貢献も果たしている。デンソーの工場も見学させていただいたが、こちらはトヨタ生産方式が最も実現されているところで、経営的な面でもたいへん興味をもてた。見学後の質疑においても活発な質問が出された。



③B O I (タイ国投資委員会)

生徒がB O Iについて事前学習して準備した質問事項を、あらかじめB O Iのボンゴット氏(本校卒業生)に送り、それを反映させた内容であったので、たいへん身近な問題として話を伺うことができた。B O Iでは、タイ経済や産業の発展に貢献しようとする内外企業の誘致、斡旋、雇用機会の創出、技術の導入、海外市場への輸出拡大、外貨獲得などを主な仕事としているが、投資奨励策、たとえば、法人税の免除、輸入機械の輸入税免税の策定、最近では投資地域の拡大のための投資条件の緩和など、諸外国との密接な連携のなかでの自国の経済の発展のためになしうることを模索しているとのことであった。また、最近の投資傾向としては、日本がダントツであり、中でも、電子電気機械の部門と自動車、化学製品の部門に集中しているとのことであった。続いて、バンコクにあるJ E T R Oの酒井様よりタイ経済における日本と日系企業の位置づけ、および、投資国としてのタイの魅力について中国との比較を中心にお話をいただき、大変興味深く拝聴することができた。

(3) 最後に

日本の企業はアジア各地に海外投資を行っている。その結果、われわれは安価に製品を入手することができる。たいへんありがたいことである。また、海外投資を受けている国にとっては新しい技術が導入され、雇用の機会も拡大され経済も潤うことになるだろう。しかし、新しい技術や文化が土着の文化にすんなりとは溶け込めることは珍しいことであろう。必ずや、摩擦はあるだろうし、軋轢は生まれると思う。その緩和剤として、たとえば、B O Iなどが機能していくとすれば、それはすばらしいことだと思う。タイと日本の関係はこれからも緊密であり、よい友好関係が保たれるようにこれからもありたいとの思いを今回の旅行で再確認した。

最後に、デンソーの政岡様、東様、トヨタの岡野様、B O Iのボンゴット氏、アチャラ氏、スターシー氏、クリッサダー氏、チャトセン氏に感謝の意を述べたい。

6. タイ王国の最高学府

(チュラロンコーン大学)

(1) スケジュール

8:15 Hotel 出発

8:50 大学到着

9:00-9:30 大学紹介 by Dr.Dusit (ad.23)

9:30-

A:微生物学研究所→博物館→化学研究室

→海洋科学→地学 (34名 引率 山川)

B:工業ロボット→鋳物→オートメーション

→ナノテクノロジー (20名 引率 金城)

12:00-13:00 昼食 at SAS

13:00-14:15 生協および学会会館

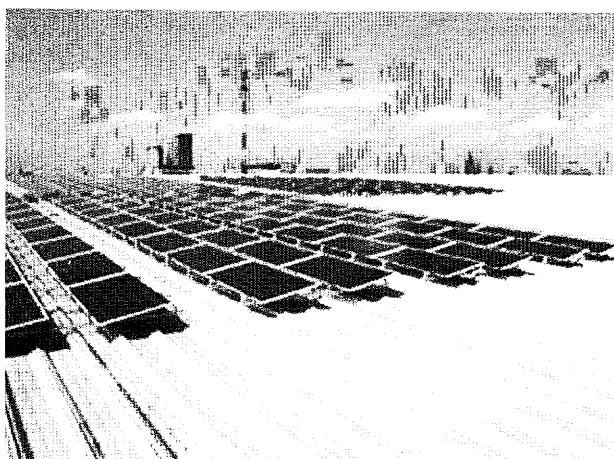
14:30-15:30 毒蛇研究所

(2) 訪問先の概要及び生徒の様子

チュラロンコーン大学はタイの東大と言われる大学で、バンコクの中心部に設立されている。大学内に神宮外苑のような広大な芝地の公園を取り囲むようにいくつもの学部が建っている。卒業生が活躍しているのは理工学部で、23期生(タイ留学2回生)のデュシット氏を筆頭に、36期アナワット氏、38期プーム氏が他数名の卒業生が教官をしている。特に、デュシット氏は太陽光発電に関する研究で国際学会を引っ張る活躍で、タイでの重賞を受けている。

本コースに希望した生徒は54名。事前に生物化学系見学コース34名と機械工学系見学コース20名に分かれた。生物化学系をアナワット氏が、機械工学系をデュシット氏とプーム氏が担当してくれた。

機械工学系は、プーム氏の話の後、氏の関わられている旋盤、鋳物等、ものづくりの実習棟を見学。その後、デュシット氏の研究室にて半導体開発についての実物を交えての話を伺い、さらに、大学の外に出てバスで10分ほど行ったところに、開店して間もないスーパーマーケットの屋上に氏が設計担当して作られた世界一と言われる太陽光発電施設の見学に出た。



大学に戻り、学内ツアーを行った後、隣接施設の血清研究施設（毒蛇研究所）に入り、ある種の蛇と共生するタイの生活についての話等、なかなか興味深い学習が出来た。

7. タイの人々のよりどころ—プミポン国王—

(ロイヤル・チトラダ・プロジェクト、
チトラダ・スクール)

(1) スケジュール

- 8:00 ホテル出発
- 8:45 チトラダ宮殿入場
- 9:00 ロイヤル・チトラダ・プロジェ
～12:00 クトの施設見学
 - ・Candle Making and Sale of Honey
 - ・Fruit Juice Plant
 - ・Chitralada Model Rice Mill
 - ・Rice-huck Compressing Plant
 - ・Plant Tissue Culture Laboratory

- ・Chitralada Daily Farmand Milk Plant
- ・Spirulina Platensis Production
- ・Mushroom Culture
- ・Royal Liquid Fuel Research Project など
- 12:00 ロイヤル・プロジェクト出発
- 12:10 チトラダ・スクール到着
- 12:15-12:45 歓迎セレモニー
- 12:45-13:45 昼食（教職員によるタイ伝統音楽の披露）
- 13:45-14:10 チトラダ・スクールの学校紹介ビデオ鑑賞
- 14:10-14:40 文化交流
- 14:45-14:50 お別れの会
- 15:10 チトラダ宮殿出発
- 15:20-16:30 ウィマンメーク宮殿見学
- 17:00 ホテル到着

(2) 訪問先の概要及び生徒の様子

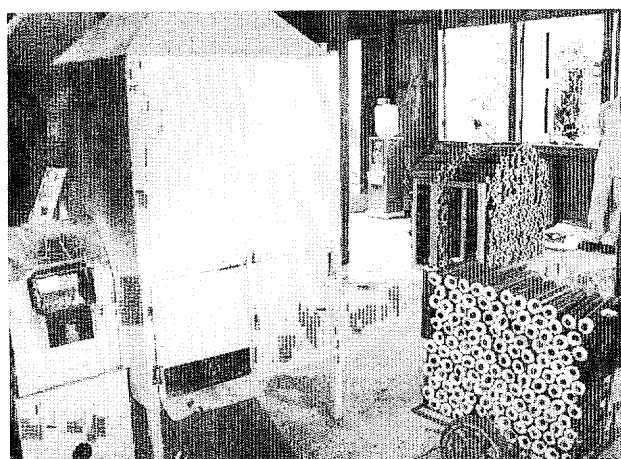
まず、シーアユタヤ通りのゲート前で、本校卒業生であり、チトラダ・スクールの卒業生でもありクリッサダー氏と落ち合い、事前にはいただいていた「入場許可証」を提示してチトラダ宮殿敷地内に入った。同行のガイド氏も「いつも高い塀の外から眺めるだけだった宮殿の中に入れるなんて、感激です。」と興奮気味であった。

施設見学は決まったコースとして設定されており、我々一行にも説明役の職員の方が一名ついてくださったが、タイ語しか話せないため、事前をお願いしてあったとおり、クリッサダー氏が巧みな日本語を操って、懇切丁寧に通訳兼説明役を果たしてくださった。タイ国民の国王への敬意を流暢な日本語の敬語で説明し、また、プロジェクトの有用性を説明して下さるクリッサダー氏の言葉に、生徒は引きつけられていた。

生徒の態度は、熱心かつ積極的なものであったといえる。興味をそそられたプラントでは生産物を手にとって感嘆の声を挙げたり、全体移動から多少遅れそうになりながらもその場に残って詳しく見学し、慌てて走って追いつくという姿も見受けられた。しかし、考察という観点からは、若干不十分な面も見られた。日本では酪農地帯に行けば当然のように見られる「ミルク・プラント」のところで、どうして説明役の方が時間をかけたのか、歩きながら生徒に問いかけたところ

る、「そう言われればそうですね」という反応だった。そこで、タイ人ガイド氏のとらえ方を伺ったところ、「牛乳は、まだまだタイの庶民の口に簡単に入るものではない。それゆえ高栄養の食品としてさまざまな乳製品の普及を国家が推進しているのだ」という返答であった。知識を得て、そして「考える」ということこそ本当の「学び」であることを自覚できるよう、今後とも指導が必要であると感じた。

いずれにせよ、「働く王様」との異名を持つプミボン国王の国民への思いと、それを享受する国民の思いとを、生徒たちは肌で感じる事ができたようだった。



午後は学校訪問である。この日、私たちの相手をしてくださったチトラダ・スクールの生徒たちは、日本語を学んでいる30名ほどの高校生男女であった。生徒たちは、日本語と英語と半々で会話していたようだ。この日の前日に、生徒たちはすでに「学校訪問」を経験して、人間関係を作る上でのコミュニケーションの重要さと楽しさを実感したばかりであるため、昼食時から各テーブルでは会話に花が咲いていた。昼食後はタイ式の灯籠流しを校内の池で行い、その後、日本の伝統文化として「折り紙」と「書道」を披露し、短い時間ながらも、一緒に楽しむことができていた。

ウイマンメーク宮殿については、チトラダ・スクールの都合で、急遽、交流時間が短縮されたため直前に追加した見学場所である。ここはラマ5世の別荘として使われ、現在は博物館として公開されている。王室関係の見学場所として設定した。観光ポイントにもなっている場所でもあるため、説明は割愛する。

8. タイの政治

(タマサート大学法学部、タイ王国外務省)

(1) スケジュール

時刻	内容
7:30	ホテル出発
8:30	タマサート大学到着
8:45	政治学部教室に入室 ・タマサート大学紹介のVTR ・レクチャー (英語・日本語通訳) 講師：ナカリン氏 (政治学部長) 「タマサート大学の歴史とタイの政治」
10:30	政治学部教室出発 ・キャンパス・ツアー 案内：ナカリン氏・ブラジャーク氏 (英語・日本語通訳) プリディ・パノムヨン銅像→ドーム →ター・プラ・チャン→大学外周 →ホール
11:30	タマサート大学出発
12:15	バンコクセンターホテル到着 昼食
13:15	バンコクセンターホテル出発
14:00	タイ王国外務省到着 ナラティップ・オーデイトリウムへ移動 ・外務省紹介VTR (英語) “The Sun Never Sets at the MFA” ブリーフィング (日本語) 講師：ウライワン氏 チャクラバン氏 (本校41期) 「日・タイ外交・政治ならびに経済」 司会：シッティコン氏 質疑応答 ・トッサポン情報局長歓迎挨拶 ・本校代表生徒の謝辞とトッサポン情報局長との記念品の交換 ・軽食と歓談 (タイの菓子と飲み物) 外務省内視察
16:00	・タイ王国外務省出発
17:30	・ホテル到着

*時刻は予定。実際には全体で30分ほど遅れたが、おおむねスムーズな進行だった。

*コースの設定に際して、タマサート大学政治学部については本校卒業生のスピッチャー氏 (タマサート大学

理学部)、外務省については卒業生のシントン氏(駐日タイ王国大使館参事官)・チャクラバン氏(タイ王国外務省)に仲介の労を取っていただいた。

(2) 研修の概要

事前指導では、1学期にタマサート大学とタイ現代政治の歴史やタイ外交の特徴について簡単な講義を行い、夏休みの課題図書として、末廣昭『タイ 開発と民主主義』(岩波新書、1993年)を読ませ、内容要約と旅行本番に向けて調べてみたい課題の提出を求めた。そのうえで、出発直前と現地で行程の確認を行なった。

当日は51名の生徒をバス2台に分乗させ、教員2名で引率した。日程と研修内容は前掲の表の通りである。なお、タマサート大学の講演・質疑は当初、英語(通訳なし)の予定だったが、大学の配慮により同大学教員と日本人留学生がキャンパス見学も含めて、通訳をしてくださった。これによって、生徒の理解度は相当高まったと考えられる。

(3) 生徒の反応と反省事項

タマサート大学の講演に対しては、国王・軍・学生運動といったタイ現代政治を動かしてきた主要な要素をとらえた質問もあり、外務省では通常は一般の外国人旅行者は見学することができない会議室等を見学することができた。事後の生徒アンケートでもコース全体としてはおおむね好評だったようである。

とはいえ、生徒の居眠りなどが散見されなかったわけではない。VTRや講演の内容は、タイの現代史や、タイに限らず政治・外交に関心のある者にとっては非常に興味深いものだっただけに、一部生徒の態度・行動は非常に残念だった。そこで、今回の研修の様子から、今後同種の研修を実施するとした場合、工夫が必要だと思われる点を2・3指摘しておくが、具体案に

ついては今後の課題とさせてもらいたい。

- ①文系的な内容の講演や見学の場合、その場で目や耳を驚かす要素は少ないだけに、生徒の興味・関心を喚起し、予備知識を身につけさせるための事前指導が大切である。特に、興味・関心をどう引き出すかという点について、効果的な手法の開発が必要だと考えられる。
- ②英語講演(VTRの視聴)を聞いて、メモを取るためには、単なる英語力の問題だけではなく、それなりのコツが必要である。事前指導の内容の一環として検討してみるべきだった。
- ③一部の生徒の言動には、タイや東南アジアについての無知というだけでなく、「そんなことは知らなくてもよい」というような感覚を感じざるをえなかった。これについては地歴・公民科等の教科教育、あるいは生徒指導全体にわたる問題として受け止めていかなければならないように思われる。

[4] アユタヤ遺跡群見学

2クラスごとに3台のバスを割り当て、バスツアーの形式で見学した。見学場所は以下の通り。見学の順序については、バスが一箇所に集中しないようにとの配慮から、2台ずつ6パターンを設定をした。

- ・バンパイン宮殿
- ・日本人町跡
- ・チャオ・サン・プレイヤー国立博物館
- ・アユタヤ歴史研究センター
- ・ワット・プラ・マハタート
- ・ワット・ラチャプラナ
- ・ワット・プラシーサンペット
- ・ヴィハーン・プラ・モンコン・ポピット
- ・ワット・ロカタスタ



旅行後アンケートの自由記述欄には、「壊れたワットに圧倒された」「すごいスケールで驚いた」「バンパイン宮殿がとてもきれいで印象的だった」という肯定的な意見とともに、「時間的にタイトだった」「疲れた」などという意見も散見される。下見を踏まえての無理のないプランニングをしたつもりではあったが、旅行最終日ということで、生徒の疲労蓄積は予想以上だったように思われる。また、予想外に生徒の体力がないことも実感させられた。

河川によって東西貿易の中継貿易港として繁栄した往時をイメージしつつアユタヤを見学するため、当初は船を使ってチャオプラヤー川からアユタヤ入りすることを考えていた。しかし、時間の都合上やむを得ず終日バスツアーという形をとった。400年におよぶアユタヤ朝の栄華や17世紀前半の山田長政の活躍ぶりを、生徒がどこまで感じることができたかは難しいところだが、ビルマ軍による徹底した破壊に対しては、深い感慨を抱いていたようである。旅行後アンケートを参照されたい。

VI. 学習旅行後アンケート

学習旅行終了後、生徒に以下のような感想を問い、おおよその反応をつかんだ。回収率はクラスによって差異があったが、おおよその結果は以下のものであった。

アンケート前文

◇以下、それぞれの総合評点については、次の感覚で、10段階評価で記入して下さい。

- 10：この上なく素晴らしかった
- 8：たいへん良かった
- 6：まあまあであった
- 4：やや期待外れだった
- 2：得るものがなかった

◇選択肢については、一致する記述があれば、○をして下さい（複数付けても、全く付けなくても結構です）

◇空欄には、感想や先方へのメッセージ等、自由に書いて下さい（空欄可）。

I > 第3日 コース別研修について

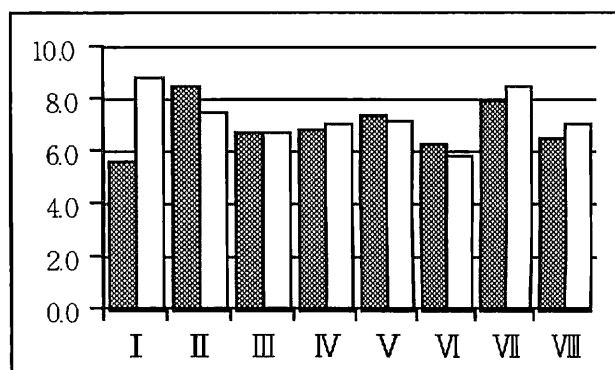
第3日の施設訪問先は次のようである。

- I、タマサート理工&太陽電池
- II、社会福祉施設&病院

- III、帝人&Biotec
- IV、環境資源&蘭
- V、日系企業 &BOI
- VI、チュラロンコーン&毒ヘビ研究所
- VII、チトラダ
- VIII、タマサート政治&外務省

生徒が各コースについて行った10段階評定の平均点を表にすると下のようであった。

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	Ave
AM	5.6	8.4	6.7	6.8	7.3	6.2	7.9	6.4	6.9
PM	8.8	7.5	6.7	7.0	7.1	5.8	8.4	7.0	7.2

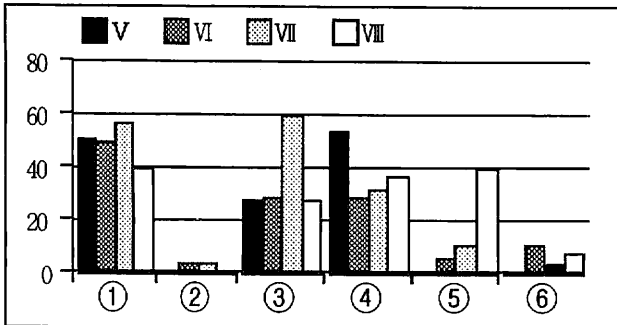
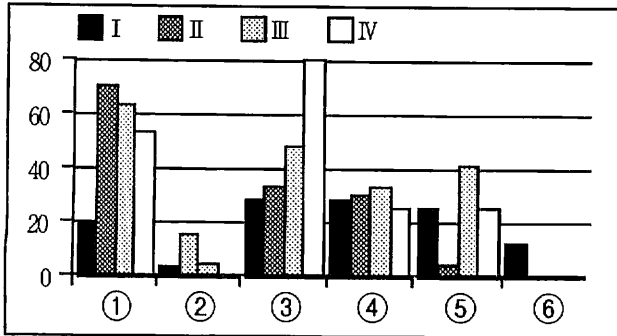


特に高い評価となっているのは、IIの福祉施設と病院、Iの太陽電池研究所、VIIのチトラダスクールであった。外務省やBOI、蘭施設などは、引率者は非常に高い評価をしていることから、コースとして高校二年生ではまだ評価し切れないものがあったかと思われる。

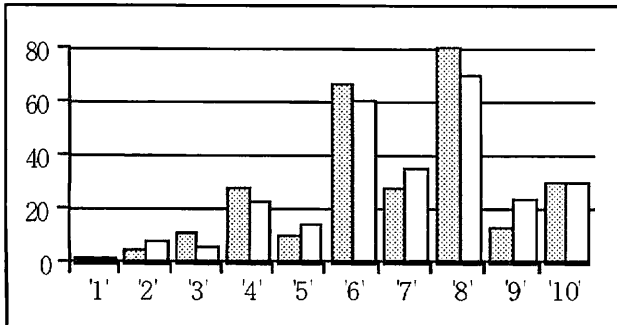
感想を次の6つの選択肢の中から複数選択可として選べた。結果は下表のものであった。

- ①なかなか得られない貴重な見学ができた
- ②眼から鱗が落ちるようなショックを感じた
- ③とても親切な歓迎と対応に感激した
- ④勉強になることが多く得られた
- ⑤言葉が十分に聞き取れずよくわからなかった
- ⑥残念ながらレベルの低い感を覚えた

これによると、社会福祉施設で「目から鱗が落ちた」環境資源・蘭農園とチトラダで「親切さに感激した」日経企業・BOIが「大変勉強になった」というのが目立つ。なお、英語で説明された見学先では現地英語に苦勞したようである。



次に、コース別ではなく、施設見学というものの自体を生徒が総じてどう受け止めたかの10段階評価をグラフにしたものが下表だが、6～8という評価が厚い。



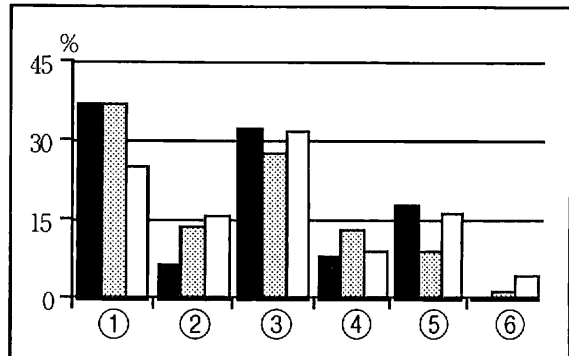
II > 第2日 学校交流について

- 1、St. Gabriel's
- 2、Srinakharinwirot
- 3、Chulalongkorn

感想は？

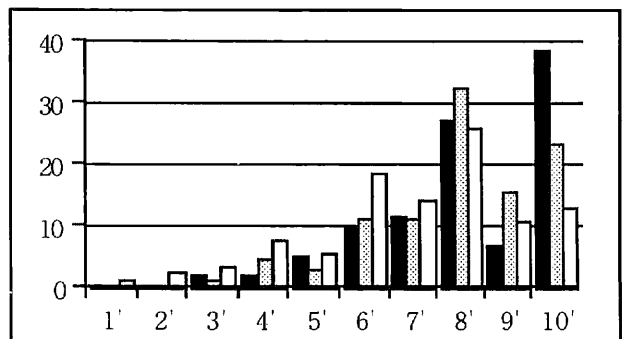
- ①あまりの歓迎と親切さに感激した
- ②日本の教育・文化について考えさせられた
- ③お互いに素晴らしい交流ができ親交を深めた
- ④相手校にも十分に楽しんでもらえ、良かった
- ⑤言葉が十分に通せず間が持てなかった
- ⑥馴染めず、まったく面白くなかった

	①	②	③	④	⑤	⑥
St	37	6	32	8	17	0
Sri	37	13	27	13	9	1
Chu	25	15	31	9	16	4



3のChulalongkornがやや感激が低いものの、どの学校も生徒はその歓迎に感動し、親交を深めることができた。10段階での総合評価も下表のように8～10に集中し、その平均も7.0～8.3という非常に高いものであった。現在も幾人もの生徒がE-mailによる交流を続けている。施設見学のグラフよりもさらに10が多く、生徒の感動が伝わってくる。

	1'	2'	3'	4'	5'	6'	7'	8'	9'	10'	Ave
St	0	0	2	2	5	10	11	27	6	38	8.2
Sri	0	0	1	4	3	11	11	32	15	23	8.0
Chu	1	2	3	7	5	18	14	26	11	13	7.0



なお、生徒の反省として、初めてのことで自分達の取り組みがタイの人達に比べて、不十分でありそのために満足行く交流会ができなかった。これを踏み台にしてせめて3年でもこの企画を続けてくれたなら、はるかに素晴らしいものになるだろうという反省が聞かれた。特に、チュラ大附属については、相手校の気持ちの入れ様と、本校の消極的な気持ちとのすれ違いがこのような

アンケート結果に出ている。また、個人のパーソナリティ等のためか、やはり多くの人に話し掛けられたり、写真を求められたりする生徒と、引込み思案の生徒とでどうしても思い出に差が出るのはいたしかたないことだろう。

当初、われわれは事前に生徒どうしのメールのやり取りを通じておき、訪問での対面を考えていたが、相手も本校がどのような者かもわからぬ心配、年度や学期の時期のずれなどからそれは叶わなかった。日常、英語を使うことの少ない日本の生活で、この機会に英語を日常的に使う機会となるかと言う期待もあったがそれは叶わなかった。ただ、実際に会ってからは本人達の意志でメール交換を続けている話は少なくない。

また、当日の言語については、互いに外国語での会話である。タイの生徒の方が平均的には英語での会話にはやや慣れているものの、本校生と大きな差はなくタイ英語と日本英語での会話となり、双方の自信のなさも手伝って communication がスムーズではなかった。この点もどうしても個人差が大きく、アンケートの中には相手の英語が下手すぎると言う意見がいくらかあったが、それをどう解釈したら良いかは微妙なものである。

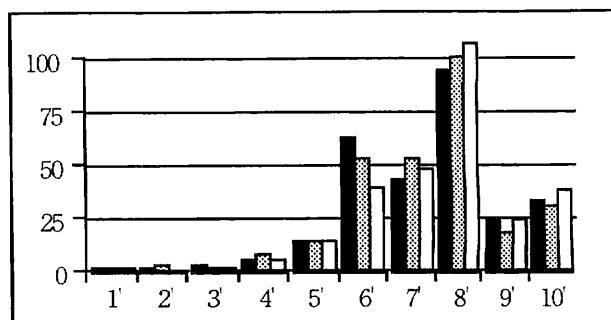
Ⅲ> 第2日 市内見学について

学校交流の後、午後はバンコク市内のもっとも代表的な寺院

- ・ Wat Arun (暁の寺)
- ・ Wat Pho (涅槃寺)
- ・ Wat Phra Kaeo (エメラルド寺) と王宮

を訪れた。平均点・分布は次表のようで、三ヶ所の寺院に有為な差は認められず、10段階評価で評価8に集中しており、平均点も7.5とまあまあ満足行くものだったのではないと思われる。ただ、誰もが感動するタイを代表するもっとも美しい寺院に対するよりも、学校交流に対する評価の方が明らかに高いことは、いかに学校交流が生徒に与えた感動が大きいものであったかを物語っているものと言えよう。なお、このとき川を渡って移動し、川の様子、バンコクの町の川からの顔、また、船を下りてからの屋台や店など、それらにも生徒の関心の目は向いていたことがアンケート以外から見る事ができる。

	1'	2	3'	4'	5'	6'	7'	8'	9'	10'	Ave
暁	1	1	2	5	14	62	43	94	24	32	7.4
涅槃	1	2	1	7	14	53	52	100	18	30	7.4
王宮	1	0	1	5	14	39	48	107	24	38	7.6



Ⅳ> 第4日 アユタヤ見学について

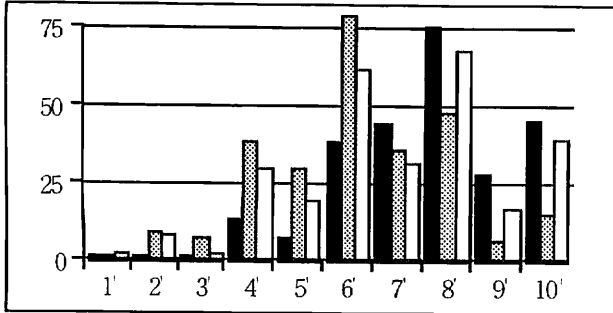
第4日はクラス別のアユタヤへのバスツアーで、バンパイン宮殿、日本人町跡、Study Center、Museum、Phra Mahathat、Ratha Burana、Si Sanphet、Mongkon Bophit、Lokaya Suthaを訪れたのだが、30分刻みの見学で、おそらく生徒はよく個別に評価するのは難しいと思われたので、アンケートでは

- I、Ban Pa In Palace
- II、Study Center & Museum
- III、日本人町跡&遺跡群

の3つに分けて10段階評価を書かせた(下表)。結果は表のように、博物館と学習センターは印象が弱く、美しく広大な庭を持つバンパイン宮殿が8をピークとしている。日本人町については中華街のようなものか少なくともそれなりの家の並びのある町を思っていたようで、失望感が強かった。それと遺跡寺院群とをいっしょにして評価を書かせてしまったのは、アンケートを作る際の失敗であった。今回の旅行で土産物を適当な価格で買える唯一の場所で、生徒も多くの買い物をしてはいたが、それでも日本人の立派な足跡や過去の繁栄を見ることができなかった失望は大きかった様だが、これは外国から見える日本の姿でもあるので、そここのところを学んで欲しいものである。

今は、アユタヤ遺跡に見られるものはビルマとの戦いの跡と偶像崇拝の象徴のような崩れ落ちた遺跡(石)の荒涼とした土地だけで、当時の世界の商業の一大拠点として栄えた大都市の姿は感じ取られなかったが、河口から船でアユタヤに入る方法を取り、十分にかつてのアユタヤについて学んでいたならもっと違ったものを生徒は見られたらろうと、反省が大きいところである。

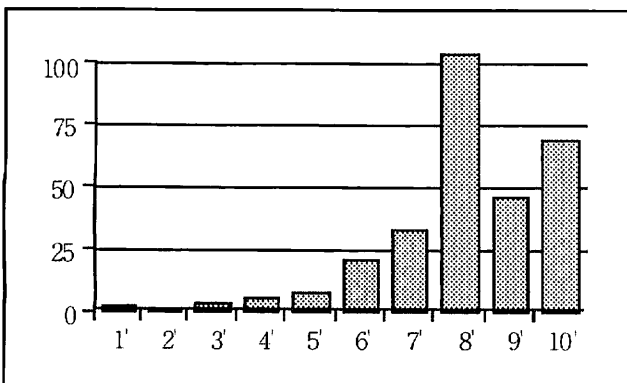
	1'	2	3'	4'	5'	6'	7'	8'	9'	10'	Ave
Ban	1	1	1	13	7	38	44	76	28	45	7.6
博物	1	9	7	38	29	79	35	47	6	15	6.2
遺跡	2	8	2	29	19	61	31	67	16	39	6.9



V> 今回の学習旅行、体験しての評価と感想は？

一年の段階で、修学旅行をタイとしたとき、海外旅行への転換を喜ばない生徒や保護者がいるとは想像していなかった。だが、インターネット投書欄にほやく投書、命の危険・食事の危険・感染症のおそれを訴える保護者会等、外国に連れて行かれる恐怖等々、予想外のことがおこった。特に、タイ航空の利用について理解できない声も直前まで強く、それらを粘り強く説得しながら行った学習旅行となった。そして、われわれ担任団には、実際に行ってくれば、間違いなく喜んでもらえ、また、生徒の人生への贈り物として（すぐには気付かなくても）かけがえのないものを贈ることができるとの思いでこの旅行を遂行した。下表は、この修学旅行についてどうだったか、総じての評価をまとめたものである。アンケート回収率88%、8~10に83%、平均点8.2というのが結果であった。すべてはこの驚異的な数字が物語ってくれていると言ってよいだろう。

	1'	2'	3'	4'	5'	6'	7'	8'	9'	10'	Ave
総合	1	0	2	4	6	20	32	104	45	67	8.2



VII. 修学旅行の沿革と方向性について

東京学芸大学附属高等学校が発足したのが1954年、最初の修学旅行は2年後の1956年4月、3年が九州、2年が北海道へ行った。以降、1966年の12期生まで北海道旅行が続けられた。次の13期生から45期生までは奈良・京都でのグループ活動を中心とする修学が続けられ、独自の資料集・学習書など多くの実践研究が蓄積されてきた。京都奈良グループ方式修学旅行を最初に行ったのは神奈川県立川崎高校で1963年のこと、地理の教師をしていた市田宣夫が中心となって始めたことだが、当時は集団護送旅行方式（市田の言）が当然とされ、グループ行動は暴挙のように思われ、新聞各社でも取り上げられた。今回、学年主任を勤めた金城も、かつて市田の下で教員として修学旅行の改善に取り組んだメンバーの一人である。学芸附属がグループ活動を取入れたのは、その4年後であるからかなり早い時期の試行になるが、その後、1970年代に入り、グループ活動は急速に広まり、むしろ修学旅行の一般的なスタイルにまでなった。特に、本学の附属中学4校でもまったく同じように、奈良・京都でのグループ学習が行われ、一般の中学でも同様のことを行う学校が少なくなって来ていた。それでも1970年代のオイルショック前までは行政の既成も強くなく、高校は6泊7日かそれ以上だったのだが、金城が附属高校に来て担当した35期と40期の頃には、5泊6日で多くの生徒・父母から中学の繰り返しという声も多く、ただただ中身の深さに導くという状況になっていた。特に、40期では、聞き覚えのあるところに止まらぬよう、いくつもの熟知者好みのコースを設定し、関西広範に及ぶコースバスを設定し、テーマ学習を促すような試み、旅行期間中に宿舎で旅行記を記させるような試みを尽くしたがやはり新たな修学旅行を考えねばならない時代に来ていた。

2000年、46期では新たな修学旅行の発想を探り始めた。本校の地歴公民科では1956年以来、社会科見学実習が行われ、都心近くのいくつもの施設・研究所を訪問し、現実社会に関する実地学習の成果を上げていた。また、かつて高度成長期後、公害問題などが激しくなった時期、父母の中から出た「古い歴史や文学の世界も良いが、これから生きる子供達には、今の歴史や日本の姿をしっかりと見せることが大切ではないか」という指摘が課題として残っていた。社会見学実習は大きな学習効果を上げてはいたが、半日見学であったため、どうしても近くに絞られてしまっていた。幸い、本校のある東京お

よびその周辺には多くの会社・施設・研究所が集中しているから、それらを見学するだけでも大きな学習になるのだが、その発想で日本全土を学習対象としてはどうかというのが46期(2000)の改革だった。古都・古代史へのロマンはその中の一つに加え、33年間の蓄積は活かすことができる。他に、明治維新・五城郭・開港・アイヌ民族・国土問題・漁獲問題をかかえる北海道、大陸からの玄関口・神代史・民衆の歴史の場でもあり続けて来た九州～中国、かつて日本の犠牲になり今も戦後史を一人背負っている沖縄、生徒の投票・検討の末、東京を起点に4方面に実地見学に出ることとなった。もちろんもっと多くの方面が出されたのだが、

- ・学校行事は教員が引率し指導・安全に責任を持つ
- ・80～120人に4人の引率は欠かせない
- ・引率人数は16名

そうした要件から、北海道南部、関西、九州北部、沖縄の4方面で実施された。このときも30数年前と同様、周囲の教員から安全管理の問題・指導限界の問題が最後まで指摘され続けた。なお、1967年以降、生徒を飛行機に乗せるのも初めての試みであった。幸い、すべて計画通り、充実した日程を終了し、学習成果も上がったのだが、生徒から出た不満・問題は、

- (1) 自分の希望していたコースがなくなり、嫌々ながら来たので、何もする気にならず最悪だった
- (2) なぜ、皆と一っしょに泊って楽しませてくれなかったのか

であった。(1)は極めて少数だったが、方面に分ければ思いがかわらず、皆に迷惑をかける者が必ず何人かは出ることを教わった。(2)はほとんどすべての生徒に残ってしまった思いである。修学旅行、訪問地も何もかも良かったのだが、ただ一つ、学年が分けられてしまい、一っしょに楽しむことができなかつた思っだけは解決できなかった。そのためと危機管理のためと思われるが、その後の学年では、東京から方面別という発想は取られなくなり、グループ行動、フィールドワークなどに適している訪問地と言うことで、関西への回帰がなされてきた。

50期の修学旅行を考えるに当っては、

- ・修学旅行は必要か
- ・必要とするなら、それは何をするものか
- ・今、訪問することによって生徒等にもっとも学んで欲しいもの、知らせたいものは何か

から考えた。

年	期	泊数	訪問地
1956	1	6	長崎・雲仙・別府
1956	2	7	北海道
57-58	3-4	8	北海道
59-60	5-6	10	北海道
61	7	9	北海道
62-63	8-9	8	北海道
64	10	9	北海道
65	11	8	北海道
66	12	9	北海道
67-72	13-18	6	奈良・京都
73-83	19-29	5	奈良・京都
84-99	30-45	4	奈良・京都
2000	46	4	北海道、関西、九州、沖縄
2001	47	4	九州
2002	48	4	広島・関西
2003	49	4	関西

デンマークではギムナジウムに進む者が3割、卒業は進学へのパスであり大学入試といったものはない。その間の学習に応じて、ギムナジウムからの紹介状で大学に進む。だが、ギムナジウムを卒業して、すぐに大学に行くわけではない。一年間就労するか、旅に出る。働いたり、世界を見聞し、自分が一人の人間としてこの世に生きて行くのに何をなすべきか、本当に大学に行き学習と研究に入るべきなのか、何のために、何を学ぶべきか、考えるための一年なのである。大学に行ったら試験勉強から解放され、アルバイトをしたりサークル活動に熱中しながら伸び伸びとエンジョイし、人生手形を入手しようというのではない。大学はまさに研究目標を定めて学問に励む場所であるから、その気がないなら行く必要はない。人生にはさまざまな生き方が用意されている。自分にあった生き方を選ぶ。自分がなしたいと思うことに大学の学問・研究が必要と考えたなら行く場所なのである。

社会の仕組みや流れについて問題にしようと言うのではない。日本は日本なのであるが、16～18才の若者にとって旅＝自分の知らない世界を見るような体験をすることがその人の人生にとって貴重なことには変りはない。勉強でも知識でもない。自分が抱いていた想像が幻想だったことに気付いたり、何と言うことはないが思いもよらなかったことを体験すること、それはそのときには何も気付かないかも知れない。ところがそうしたことこそ、その人がこれから生きて行くときの考えや思いを動かす貴重な体験となる。今は、象も蛇もない、ジャングルでも廃墟でもない、まったくわれわれと同じよう

な町に住み、同じように勤めたり、通ったりし、日々の生活を送っている人がいる。多くの人が歩いている町がある。その人達が、襲い掛かることも侮蔑することもなく、親しみを満面に表して歓迎して迎えてくれる。そのような人が、未開発で貧乏で文化が遅れていると思っていたところに沢山いて、自分達と仲良くなろうとしてくれた。ただ、それだけの体験であるが、これから生徒達が生きて行く時代は、もはや欧米列国に追従し学ぶ時代ではなく、いくつかの国の政治的な策略にも接しながらこの大平洋の西の端で、いくつもの国と手をたずさえながら独立したパートナー（いろいろの信望と期待を受ける）として生きて行く時代がそこまで来ている。そのとき、バンコクは再び東南アジアの商業の中心の港町になる可能性は高い。そのとき、そこに対する素直な感情、暖かい信頼感、そして共に栄えようとする友情意識があったなら、その人達は日本が過去にそしてこれまでして来たような過ちはせず、世界から好かれる日本になるだろう。話が飛躍してしまったが、50期の修学旅行を考えるのに、50期の担任団が考えたことは以上のようなことであった。

外国の中にはいろいろな国がある。危険な国、不衛生な国、貧しい国、階級制の厳しい国、そして食事の種類も価格もそれぞれである。タイへの修学旅行を決めたとき、父母から多くの懸念が出された。その心配は一言で言うと「そのような所に連れて行って子供を無事返してくれるのか。何もあえてそのようなところに行かなくてもいくらでも安全で楽しめる場所がいくらでもあるのになぜタイなのだ」ということかと思う。細菌や虫による伝染病、食事の衛生、人の危険、都市交通の問題、病院体制、ストリートチルドレンなど多くの具体的な問題を上げて、それに対する危機管理の不備を学校側に指摘するという、政府と市民団体的な場面すらあった。タイのバンコクにはそうした心配が東京よりも少ないくらいで、こと病院に関して日本と日本の病院の比較ではないほどである。上下水道とも完備し、食べる物も屋台で特殊な物を口にすれば以外には危険はない。むしろ世界的に見たら珍しいほどの安全な近代都市である。だが、われわれ教師としてはこれから日本をリードして行くこの若者達、どのようなところにもでかけ友情の手を差し伸べ、同じ地球に生まれた者どうし、共に安全に食足り、清潔な生活を営めるよう努力する気持ちを抱いて欲しい。そのような所に早く自分の責任で行き、世界とともに歩む日本をリードして欲しい。われわれが考えたのはそうしたことであり、遺跡の見学も、施設の見学も、学校訪問も、

それらを見聞きして知識を増やすのではなく、それらを通して自分が何をすべきか、デンマークのギムナジウムの卒業生が行う旅に近いものをしてもらうことであった。

いま、日本の若者も大人も日本を見失っている。外国を訪れ、外国の人と接したとき、あるいは外国の人達の行いを見るとき、日本人が過去のどこかに置き忘れて来たものを見るが多くなった。人への思いやり、やさしさ、礼節とくに家庭や学校における礼節、まじめに取り組む姿勢、謙虚さ、どれも日本人の代名詞のように言われたが、今はそれをいろいろな外国の人の中に見ることが多くなった。われわれは、タイの人達の陽気さと心からの熱い歓迎、それを経験しただけで今回の旅行には意味があると思っている。

なお、この学習旅行にはもう一つの思いもある。タイ国に対しては1975年、22期生から留学生を受け入れるようになったが（当時の岸信介がタイからの要請を受けてなったもの）、今回訪問したチュラロンコーン大学附属にしても、どこの国の高校も本校のような学校では多くの留学生を受け入れ、子供達も先生も日常的に国際交流を行っている。日本はもっと国際的に開いて行く必要がある。また、教師自信の目ももっと国際的に開いて行く必要に迫られている。理由は

- ・今や授業への取り組みが日本ほど悪く、しかもそれを教師がなおざりにしている国は他に例を見ない
- ・教師も生徒もこの恵まれた教育環境に深く感謝すべきであること
- ・他国を見ると、日本のいいところ悪いところ両方が認識でき、教育を原点から顧みることができる
- ・日本の学校は外国と互いに与え合うものが多い
- ・諸外国、特にアジアやアフリカの諸外国が日本が教育の国際交流をリードしてくれることを強く願っている

ことである。これからの本校の教育姿勢は、学校も共同研究関係をいくつもの国と結び、生徒も国際的な人的ネットワークを作り、将来本当の意味でのアジアの共栄を目指して努力し、アジアのユーロといった発想が出てくるようにすることであろう。少なくとも50期はそこに向けて出発したのである。

なお、本学習旅行に当たり、貴重な情報を提供して下さいました茗溪学園、向上高校、そしてもちろんタイ国大使館に深くお礼を申し上げます。

50期総合学習指導計画

(資料1—シラバス)

回	日(木)	LHR	総合学習	学習目標	学習内容・留意点など	備考
1	4/15		総合学習について (ガイダンス)	総合学習について理解する。	全体説明で、年間計画の確認。異文化理解・アジア理解の意義。学習旅行の位置づけの確認。個人別学習テーマについては、タイそのもの・アジアそのものにこだわる必要はなく、研究の中でアジアなりタイなりに視点を置いて日本と比較すればよいことを指導する。	○学習旅行委員会新規顔合わせ・責任者決定
2	4/22		テーマ選定	個人別学習テーマについて、やろうと思っていることの内容について、クラスで全員が1分間スピーチを行う。	事前の題目およびこの日のスピーチに基づいてゼミクラスに振り分け、個人別学習テーマを設定し、題目を仮決定。その後1週間かけて先生方にテーマ内容についてのアドバイスをいただく。	
3	5/6		テーマ別ゼミ①；題目決定と顔合わせ	個人別学習テーマを決定して各ゼミに分かれ、顔合わせを行う。	アドバイスに基づき、この日までにテーマを正式に決定し、具体的な調査項目や目標などととも整理する。	
4	5/13		コース別研修①； コース決定(国内含む)	見学コースの決定と班分けを行う。	同クラス・他クラスの、同じコースのメンバーと顔合わせをし、互いの学習テーマの紹介を行う。7/1の発表方法も決める。	
	5/20～25		中間考査			
5	5/27		テーマ別ゼミ②； 基礎調査	設定したテーマについての基本的な調査を行う。	書籍類やインターネットなどを活用し、設定したテーマについての基礎的な情報を得る。	
	6/11		体育祭			
6	6/17		テーマ別ゼミ③； 基礎調査報告	設定したテーマについての基礎調査の内容を報告する。	書籍類やインターネットなどを活用し、先に収集した情報について深める。	
7	7/1		コース別研修②； コースに関する基礎知識の整理	発表形式でのコースの紹介。	あらかじめ決めた方法により、コースの概要を発表する。	
	7/5～8		期末考査			
			家庭学習期間 ～夏休み	各自テーマの調査を進める。	自分のテーマに関わる調査を行うため、全員が1回ずつ必ず何らかの施設見学を行い、その内容を含めた中間報告を9月初めに提出する。	
8	9/2		論文の書き方&施設見学 レポート提出	旅行後にまとめる論文の書き方について理解する。また、施設見学レポートを回収する。	総合学習のみならず、今後書いていけるであろう研究論文の書き方を、いくつかの分野から紹介し、自分でも今回の論文の構成を試作する。	
	9/3～6		辛夷祭(準備含む)			
9	9/9		学校交流準備①(委員中心)	訪問校別に交流会の準備を始める。	交流会の内容に基づいて、準備する事柄を分担し、進めていく。	
10	9/16		タイに関する講演会	タイに関する識者・研究者をお呼びして、講演を伺う。	できれば学外の方にご協力いただく。	

11	9/30		テーマ別ゼミ④； 中間報告その1	これまで（夏休み含む） 調査した内容を、各クラ スで報告。	1人数分で、これまでの研究 成果を報告し、質疑応答を通 してテーマの問題点を明確に する。	○タイ国留学生・卒 業生の協力
12	10/7		テーマ別ゼミ⑤； 中間報告その2	前回の続き	前回の続き	
13	10/14		委員裁量時間	学習旅行委員の企画で、 旅行に関する準備を進め る。		
14	10/21		語学学習	タイ語の基礎を学ぶ。	タイ語の挨拶と日常基本会話	
	10/22 ~ 26		中間考査			
15	10/28		コース別研修③	現地で見学する際のポイン トの確認と、最終的な 注意事項の伝達。	服装等も最終確認。	
16	11/4		学校交流準備② (委員中心)	訪問校別に、進めてき た交流会の準備を完成す る。	進めてきた交流会準備を仕上 げ、段取りについての共通理 解を図る。	
17	11/11		テーマ別ゼミ⑥； 視点の確認	現地で見学する際の最終 的な視点の確認。	全員が簡単に、何に重点を置 いて見てくるかを発表する。	
18	11/15 ~ 19		タイ学習旅行			
19	11/25		テーマ別ゼミ⑦；課題の 掘り下げと論文構成①	各自の課題の問題点の掘 り下げと、論文の本格的 構成を行う。	旅行で得た知見をもとに、各 自が設定した課題について深 く追求しはじめ、あわせて論 文の構成を試み、冬休み中の 執筆に備える。	
20	12/2		テーマ別ゼミ⑧；課題の 掘り下げと論文構成②	同上	同上	
	12/8 ~ 13		期末考査			
			冬休み	論文を執筆し、一通り完 成する。	論文は、以後の指導で修正を 求められることが考えられる ため、パソコンで作成するも のとする。	
	1/11		始業式	論文の第一次提出。	提出論文には、必ず構成（目 次）とサマリーを付すものと する。	
21	1/13		テーマ別ゼミ⑨； ゼミクラス内発表会①	これまで研究し執筆して きたことを、ゼミクラス 内のグループ単位で全員 が発表する。	発表に基づき相互批評を行 い、研究内容の改善点を指摘 し合う。また、グループの発 表代表者も決める。	
22	1/20		テーマ別ゼミ⑩； 論文修正	指摘に基づき論文の修正 を行う。	適宜教官の指導を受けなが ら、論文完成に向けて最終検 討を行う。	
23	1/27		テーマ別ゼミ⑪； ゼミクラス内発表会②	グループの発表代表者が クラス内で発表を行う。	全体発表会の発表者を、この 日の発表者の中から1名選出 する。	
24	2/3		全体発表会（委員進行）	各クラスの代表者1名ず つが、講堂で発表を行う。	2時間を使って発表会を行 い、保護者や、できれば51 期生にも参観してもらう。	
25	2/24		テーマ別ゼミ⑫；論文最 終提出&振り返り・討議	各自の研究論文を提出 し、あわせて1年間にわ たる総合的な学習を振り 返って、グループごとの 討議を行い、感想をまと める。	1年間の総合学習のまとめに ふさわしいものを提出する。 電子ファイルとプリントアウト したものの両方（研究報告 書へ）。振り返り・討議では 学習の反省を通して、各自の 将来の学生生活に資する。	
	3/8 ~ 10		期末考査			